

奇跡の発掘 歓喜

三戸城本丸石垣

三戸町の三戸城跡で見つかった本丸の巨大な石垣。眠っていたのは、町民憩いの公園の地下だった。

原形ほぼ維持

幕末絵図 正確性裏付け

今回の発見で大きな役割を果たしたのが、幕末に描かれた「三戸御古城縄張之図」。当時の測量を基に、同城の構造を詳細に記すものの、現場では正確性を裏付けられずにいた。

大規模な開発の影響だ。同城跡は、昭和初期にトラック競技場として利用され、国体の開催を控えた1975年には野球場が建設された。88年に現在の城山公園イベント広場となった。

本丸の建物があった場所おらず、「遺構は残っていない」と考えられてきた。一方、町教委は発掘の機会をうかがっていたという。2015年度に国史跡指定へ向けた5カ年の調査事業が始まると、16年度に同城跡の3D地図を作成。木々が邪魔をして上空写真では分からなかった、細かい地形の特徴を把握し、幕末の絵図と重ねて、本丸の位置をつかんでいた。

発掘では、17年度に本丸へつながる巨大な大御門の痕跡を発見。本丸跡の調査の機運は一気に高まり、満を持して迎えたのが19年度

だった。本丸の石垣の発掘は8月5日に開始。おおむねの位置はつかんでいたものの、野球場ほどの広さの中から、地中の石を探るのは容易ではない。どのくらいの深さにあるのかヒントはなく、ましてや埋まっている可能性すらある。重機を使って1メートル深さまで掘り下げ、横幅を徐々に広げていった。

発見は2日目だった。前日から14メートル進んだ所で、重機のショベルが大きな石を捉えた。

長年、発掘調査を担当してきた町教委史跡対策室の野田尚志班長(48)は「昭和の開発で、本丸跡の破壊は著しいと思われていた。これほどの保存状態だったのは驚き」と話す。松尾和彦町長も「大変興奮する成果。地域の宝になる」と喜ぶ。今回見つかったのは石垣の上部で、最上部は残念ながら削り取られているという。開発の手が壊した格好だが、原形をほぼとどめているのもそのおかげだと言える。掘り返した土の中からは大正時代の硬貨などが

見つかると、昭和期の開発よりも前に大規模な埋め立てが行われたことが、結果として歴史を守ることに繋がった。

(金澤一能)



三戸城の本丸位置などが描かれている、幕末に作られた「三戸御古城縄張之図」(上)と、三戸城跡の上空写真に絵図を重ねた画像(共に三戸町教委提供、一部加工)